

原爆文学研究会報

第六三号

原爆文学研究会 二〇二二年七月

中山士朗さんのこと

野坂昭雄

もう十年ほど前になるだろうか。大分市の短大に勤務していた時、原爆に関心を持っているゼミの学生から研究テーマについて相談を受けた。某研究会を通してサークル誌に関心を持っていたこともあって、かつての別府原爆センター（原子爆弾被爆者別府温泉療養研究所）の療養者が書き残したものがあれば、それを調査してはどうかと勧めてみた。幸い、短大の事務局に大分県職員の方が出向されていて、いろいろと調べてくださり、センターの元所長である埴谷正法さんに連絡を取ることができた。ゼミ生と共に指定された場所（別府のゆめタウン！）に行き、埴谷さんからいろいろとお話をうかがうことができたが、残念ながら文芸誌のようなものは無いとのことだった。中山士朗さんが別府にお住まいだということは、確かその時に聞いたように記憶している。

ゼミ生は、その時のお話と原爆センターに関する資料を基に卒論を書き終え、埴谷さんにその後お会いする機会は無かったが、埴谷さんと自分との年賀状のやり取りは続いていた。原爆文学研究会で中山士朗さんからお話が聞ける場を設けられたら、と思うこともたびたびあったが、山口に移ってしまい、そのままになってしまった。

埴谷さんからの今年の年賀状に、原爆センターの資料を別府大学に寄贈することが書かれており、気になっていたが、四月に入って埴谷さんからお電話をいただいた。中山さんにお会いする機会を作ってください

ということだった。コロナ禍で県外から訪問するのは迷惑かとも思ったが、せっかくの機会をいただいたので、体調管理を万全にして、移動には自家用車を用い、なるべく人と接触しないようにして大分に向かった。埴谷さんはまもなく九十歳、中山さんは一つ上だそうだが、その自宅は坂の多い別府の中でもかなり奥まった高台にあり、埴谷さん運転の車で向かうしかない。大分には十五年住んでいたが、別府の町には明るくないので、しばしのドライブは新鮮であった。

今は統合されて廃校となった高校の建物が近くにあり、数年前までは生徒の登下校で賑やかであったろうと思われる住宅地の一面に中山さんの家があった。緊張したが、とても親切に迎えてくださった。奥様は既に他界され、一人でお暮らしとのこと。中山さんは、『日本の原爆文学』にも収録された「死の影」の作者として知られているが、最近では知の木々舎のブログ上で交わされた関千枝子さんとの往復書簡が計五冊刊行されている。今年に入り、関さんが亡くなり、それとほぼ時を同じくして中山さんの長年愛用していたワープロも壊れてしまったのだそうだ。

食事を摂りながら、夕方までお話することができたが、文学に関する話はほとんどしなかった。というよりも、自分は中山さんの本を数冊読んだに過ぎないので、深い話が出来なかった、と言った方が正確である。帰り際に、中山さんは関さんとの往復書簡五冊に署名して、自分にくださった。今度はお酒をご一緒することになっている。翌日、別府大学で原爆センターの資料を拝見したが、三〇点ほどの資料のうち関西、特に原水禁西宮協議会の会報などが多かったこと、PIEP（国際平和灯ろう交換）という会が存在したことなど、興味深い発見もあった。

さて、中山さんのお仕事は、小説では先にも挙げた「死の影」、またルポルタージュ「天の羊 被爆死した南方特別留學生」が広く知られているが、小説集『死の影』『消霧燈』『宇品棧橋』などは今では古書店等でも入手困難で、所蔵されている図書館も多くない。また、渋沢栄一記念財団の雑誌『青淵』や『大分合同新聞』に寄稿された文章なども、簡単に目を通すことができるとはいいがたい。そのお仕事をトータルな形で広く知ってもらおうようにすることはできないものか。

この研究会の第一期、第二期の世話人を務めてきたが、自分の専門はあくまで近代詩である。未だ博士論文も纏めておらず、やり残していることが多い一方で、勤務校の仕事は増えつつある。研究会が節目を迎えるにあたり、原爆文学との向き合い方について悩んでいた。しかし、中山さんとお会いして、そのお仕事の意味を考え、伝えることが自分に与えられた仕事のようにも感じられてきた。今後の会のあり方がどうなるうとも、まだまだ原爆文学との関わりはしばらく続きそうである。

第六三回 原爆文学研究会報告

二〇二一年五月二日(日)に、第六三回原爆文学研究会が、今回もZoomを用いてオンラインにて開催されました。オンラインでは、直接顔を突き合わせての研究会や懇親会も行えないため、原爆文学研究会の魅力のひとつである、参加者同士の顔を合わせての活発な交流をしばらく行っていないのは大変に残念なのですが、今回も対面では参加が難しい海外から参加してくださる方もあり、会自体は(終了時間が大きく後ろに押ししてしまうほど)大変に盛況なものとなりました。

最初の発表、齋藤一さんの「大和魂」対「フロンティア・スピリット——清水春雄の被爆体験とアメリカ文学研究」は、『原爆』を読む文化



事典』で執筆された「英米文学者と核時代」や、第五四回の研究会で報告された「ステイブーン・スペンダーの広島講演」などに連なる、齋藤さんが取り組んでいらっしやる一連の研究テーマの最新報告としてうかがいました。清水の辿った道程を丁寧に追いつながり、彼に関する多くの資料を分析し、戦後日本におけるアメリカ文学研究と被爆体験の関連を考察する必要を提起されました。

齋藤さんの一連のご研究は、数年後に単著としてまとめられるはずであるとの「噂」を伺っておりますので、大変に楽しみにしております。

二つ目の発表、中野和典さんの「教科書と『原爆文学』——林京子「友よ」を中心に」は、第六〇回の研究会で報告された、『原爆文学研究』に収録された「教科書と『原爆文学』——林京子「空罐」を中心に——」につづくご報告でした。大変丁寧な資料調査の結果を基にしながら「友よ」の読解を行うご報告でした。質疑応答では、資料調査による実証の部分とテキストの読解をどう関係させるか、「教材」研究と、「文学」研究の違いをどう考えるかなど、非常に活発な、大変原爆文学研究会らしい議論が行われました。

◇ 研究発表1

「大和魂」対「フロンティア・スピリット」
—— 清水春雄の被爆体験と

アメリカ文学研究

齋藤 一



アメリカ文学研究者の清水春雄（一九〇三〜一九九七）は、一九八六年に自らの研究人生を振り返る講演の中で、ウォルト・ホイットマンやマーク・トウエインを研究してきた理由について、以下のように述べている。「僅か五分の差で原爆直撃を

免れ、地獄の底から這い上がるように広島西郊の岡へ非難した私は、その夜すべての民族の純粹性を誇っていたわが国が、三百年ほどの短い歴史と人種のるつぼといわれる国に敗れた。こちらの一億一心の大和魂があるとすれば、彼らには雑多の民族を短期間に纏めあげる何らかの要因があるに違いない。それは何か。あの国では植民以来二七〇年間も、夢を追う開拓線の西漸運動が続いたので、その間に希望と敢闘精神をわきたたせるフロンティアスピリットが醸成されたであろう。その精神が文学に反映している筈である。そういう思いから、私は彼等の文学作品を通して、その国民精神を知ろうとしたのです。」この文章における「大和魂」と「フロンティアスピリット」という図式は、一九五一年の論文にもその萌芽があり、「皇統連綿三千年」の「民族の純粹性」が「三百年余りの短い歴史」の「諸人種雑居の地」と対比され、後者のアメリカ合衆国にはフロンティア・スピリットがあった、これを表現している文学作品を研究していくとアピールしている。総じ

ていえば、清水は、一九五〇年代以降、マーク・トウエインやホイットマンの作品におけるフロンティア・スピリットを分析しつつ、それが民主主義や社会の多様性を推進するものであったと論じた。

注目すべきなのは、清水のアメリカ文学研究には、広島での被爆体験とのつながりが見出せないことである。清水は被爆体験を語ってはいた。一九五五年の学生新聞でのインタビュー記事でもその悲惨を述べている。一九四六年には、知人のアメリカ人軍人に「The Atomic Bomb」という英文被爆体験記を送っている。しかし、清水は、アメリカ文学に表現されたアメリカ合衆国の思想が、原子爆弾という大量破壊兵器をも生み出したというような議論はしなかったのである。その理由は不明であるが、一九五五年に、長崎大学の鍋島直共や伊東勇太郎が、旧・長崎医科大学の正門門柱に刻まれた碑文とその英訳を作成する際、アメリカを刺激しないように配慮せざるを得なかったという事実は参考になるかもしれない。こうしたことなどを意識しつつ、清水のアメリカ文学研究について、さらには戦後の日本におけるアメリカ文学研究と被爆体験との関係について、さらに考察を深める必要がある。

◇ 研究発表2

教科書と「原爆文学」II

—— 林京子「友よ」を中心に

中野 和典

林京子「友よ」（群像）一九七七・一一）は一九八一年度から中学や高等学校の国語の教科書に掲載されるようになり、現在に至っている。教材としての取り扱いは一九八〇年代は〈平和への願い〉（教育出版「中学国語2 教師用指導書」一九八一）を、一九九〇年代は〈小説の力〉（旺



文社「高等学校国語―教授資料」一九九四）を、二〇一〇年代はその両方を学びながら〈他者理解〉（大修館書店「国語総合改訂版指導資料」二〇一七）への認識を深めるものとして位置づけられている。

教科書の指導資料を含めた「友よ」の先行研究を整理すると、「私」と中田が〈同化〉（小口賢「形象化から意識の深化へ」『月刊国語教育』一九八五・七）

しているのか、〈よき理解者たりえなかつた〉（旺文社、前掲）のか、〈粉飾のない〉体験と引き換えに〈創造的〉な〈分有〉の可能性が開かれている（村上陽子「体験を分有する試み」『日本近代文学』二〇一一・一一）のか、という解釈の違いはあるものの、小説の結末をどのように解釈するかに議論が集中していることが分かる。それだけ「友よ」の結末が読者に強い印象を与えるということだが、ここから浮かび上がる課題が二つある。第一の課題は「友よ」の結末に描かれる写真にまだ加えられていない注釈を加えることであり、第二の課題は「友よ」の結末とその前の部分をより構造的に結びつけることである。

このような問題設定をして本発表ではカメラマン・山端庸介、元城山小学校教頭・荒川秀男と元日本映画会社プロデューサー・相原秀次らによる城山小原爆被災写真集、中田のモデル・安日涼子の関連資料などを参照しつつ「友よ」の成立背景と小説との違いを整理した。その上で「友よ」の構造に注目して、序盤ではタクシーで運ばれる「私」が抱く長崎の街並みへの違和感が「復興」した街と記憶の変化に根ざすものであることを描き、中盤では汽車で運ばれる「私」の犯した罪が原爆で家族を喪った中田たちへの鈍感さに根ざすものあることを描き、終盤では罪の自覚から鈍ではいられなくなった「私」が中田と写真との特別な出会い

に立ち会うさまを描いていることについて考察した。

会場からは平和教育と国語教育の関係の複雑さや小説の成立背景の調査と構造分析の結びつけ方や「友よ」の創造性などについて多くの示唆に富むコメントや質問をいただいた。論文化する際に大いに参考にさせていただこうと考えている。

機関誌「原爆文学研究」第二〇号原稿募集

本研究会が年に一回発行している機関誌「原爆文学研究」の二〇号の原稿を左記の要領で募集します。また、今号は、第一〇号のときにように会員の皆様からショート・エッセイをお寄せいただき（仮題）原爆文学研究会二〇年」といった特集を組みたいと考えております。第一期原爆文学研究会のしめくりの企画になりますので、なるべく多くの会員のみなさまからのご投稿をお待ちしております。

今回は論文の投稿は難しいというみなさまも感想やお考えなどをショート・エッセイとしてご投稿ください。

○書 式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇二一年

一月中旬、データファイル（Wordか太郎）を添付しての投稿の場合は同年一月三〇日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁（機関誌の書式）につき、一〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八八〇―八五二〇 宮崎市船塚一丁目一一二

宮崎公立大学人文学部 楠田剛士研究室

彙報

第六三回 原爆文学研究会

○日時 二〇二一年五月二日（日） オンラインにて開催

○研究発表1

「大和魂」対「フロンティア・スピリット」

——清水春雄の被爆体験とアメリカ文学研究

齋藤 一

○研究発表2

教科書と「原爆文学」——林京子「友よ」を中心に

中野 和典

編集後記

今回の研究会では、お二方とも大変に丁寧な資料調査の結果を基に、報告を行っていらっしゃいました。コロナウイルス蔓延のために、資料調査のハードルは上がっているようにも思いますが、それを「言い訳」にはできないなど自らの研究態度を顧みただ次第です。

また今号の巻頭エッセイは野坂昭雄さんをお願いし、中山士朗さんにお会いになった際のことを書いていただきました。中山さんのお仕事に簡単にアクセスできるよう、資料整備を進める必要性を感じつつ、コロナを「言い訳」に東北からしばらく足が遠のいている私の研究態度を反省した限りでございます。

さて次回の第六四回原爆文学研究会は、九月一八日（土）に、オンラインでの開催となります。午前中は、大江健三郎『ヒロシマ・ノート』の再読企画、午後は二名の個人発表を予定しております。第六五回研究会の開催と「原爆文学研究」第二〇号の発行をもって、第一期原爆文学研究会は終了となります。第一期での開催は残り少なくなってきました。みなさまのご参加を心よりお待ちしております。（加島正浩）

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四—〇一八〇 福岡市城南区七隈八一—一九—

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631（代表）

URL <http://www.genbunken.net/>